Title	P・T・フォーサイスにおけるインディペンデンシーの影響
Author(s)	高，萬松
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.22, 2002.2：256-280
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4081
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

P・T・フォーサイスにおけるインディペンデンシーの影響

高　萬　松

序

英国の神学者、P・T・フォーサイス（Peter Taylor Forsyth 一八四八―一九二一）に対する評価は多くある。例えば、ブルンナー（Emil Brunner）はフォーサイスを「近代英国の最も偉大な神学者」（the greatest of modern British theologians）[1]と位置づけている。それは、近年ハート（Trevor A. Hart）の編集により出版された、*Justice the True and Only Mercy: Essays on the Life and Theology of Peter Taylor Forsyth*（一九九五年）という論文集に紹介されている。その他にもバルティアン（Barthian）もしくはリッチュリアン（Ritschlian）というタイトルもある。ハンター（A. M. Hunter）は*P. T. Forsyth: Per crucem ad lucem*（1974）という書を書いたが、彼によれば、フォーサイスは「バルト以前のバルティアン」（a Barthian before Barth）[2]として知られている。ブラッドリ（W. L. Bradley）は*P. T. Forsyth: The Man and His Work*（1952）という書において、リッチュルの「方法と原理を採用」[3]したという面において、彼はフォーサイスをリッチュリアンとして見る傾向があった。しかし、フォーサイスが終生リッチュリアンであったかについては疑問が生じる。

われわれは、フォーサイスが何よりも「恩寵の神学」(a theology of grace) を回復した「恩寵の使徒」(an apostle of grace) ではないかと考えることができる。というのは彼が会衆派教会の牧師としてピューリタン (puritan) の伝統を受けた点と、彼がピューリタンの伝統とその力を復興するために神学的に奮闘した点があるからである。フォーサイスにおける教会的伝統と彼の神学的闘いがあるにもかかわらず、ほとんどの研究者たちはピューリタンの影響について、無視するかあるいは沈黙している。

われわれはこのような実情に逆らってフォーサイスの神学を、ピューリタンの恩寵の宗教に照らして彼の神学に深く根ざしているピューリタン的な要素を再発見したいと思う。

一　フォーサイス：恩寵の使徒

フォーサイスは果たしてリッチュリアンであろうか。この問いに答えなければならない。そのために彼に起きた回心という体験を取り上げることによって、彼の神学的路線がどのように転換されたかについて考察してみたい。

まず、リッチュリアンというタイトルの放棄に関してみよう。われわれは、彼がどこまでリッチュリアンであるかということでなく、どういう契機によってそのようなタイトルを放棄したかということに重点を置きたい。というのは、彼が神学的モチーフによってリッチュル主義を放棄した面が見られるからである。ブラウン (Robert McAfee Brown) は *P. T. Forsyth: Prophet for Today* (1952) という書において、フォーサイスへのリッチュル主義の影響について述べる。「リッチュルは、彼 (フォーサイス) の初期の発展に大きく影響を与え、また初期の著作はリッチュリアンの路線に傾斜した。が、*The Church and the Sacraments* のような後期の著作においては多くのリッチュリアンの洞察を拒否する[4]」、

とブラウンは言う。ここには不十分さが見られる。というのは*The Church and the Sacraments*は一九一七年の著作であるが、この書物よりもっと早い時期にリッチュリアンの洞察と絶縁する傾向が見られるからである。[5] フォーサイスにおけるリッチュル主義の放棄に対する研究の中で、ハートのものはわれわれに示唆することが多い。ハートは*'Morality, Atonement, and the Death of Jesus'*という題の論文において、フォーサイスには一八八〇年代の半ばからリッチュリアンというタイトルが合わなく、むしろ「そのタイトルを転倒させた（stood on head）」[6]、と述べる。フォーサイスに何が起こったのか。それがキーポイントである。ハートは、フォーサイスに起きた回心という出来事に注目したのである。大木英夫教授が『ピューリタン』という書において、「「聖徒」になるための基本的な条件は〈コンヴァージョン〉（回心）である」[7]、と述べるように回心という体験によって、フォーサイスの神学思潮は一転したのである。ハートは、フォーサイスにおける神学的変わり目を得るためにフォーサイスの二つの説教を挙げる。一つは、フォーサイスの二九歳の時（一八七七年）*'Mercy the True and Only Justice'*という題目の説教として、これはハートによれば、「リッチュリアンの福音に対する顕著な支持（striking affirmation）」[8]の説教であり、「神学的自由主義（theological liberalism）のための声明」[9]のようなものである。もう一つは、十四年後、一八九一年（四三歳）レスター・ルートランド会衆派同盟総会議長になった時の*'The Old Faith and the New'*という題目の議長演説である。これが現れるまで、「フォーサイスは神学的に重大な決意をして、その後ずっと死ぬまで彼を占める運命であった自由主義的プロテスタント福音に対する計画的な撤回（recanting）に既に従事していた」[10]、とハートは述べる。前述したようにわれわれが最も重要視するのは、リッチュル主義の放棄に対する時期よりきっかけである。何によってフォーサイスがこのように変わったのかである。*Positive Preaching and Modern Mind*（1907）という著作において、フォーサイスは「キリスト者から信者に、愛を愛する者から恩寵の対象へと向きを変えられた」[11]、と述べる。回心という体験の真相を明らかにした言葉であろう。回心の以降、彼にはリッチュリアンというタイトルが漸進的に合わなくなる。

このような神学思想の転換はフォーサイスに起きた回心の結果である。ハートはフォーサイスにおける回心の経験を「神の下でのモラル・リアリティー（moral reality）の発見」[12]としてみなすが、われわれは「恩寵の発見」として見なしたい。というのは回心の体験以前は教会に必要なのが啓蒙された教えと自由主義的神学であるという考え方の持ち主であったが、体験の以降は新しい人間として恩寵という理念を回復しようとした試みがあったからである。恩寵の発見ということについて、われわれは二つの観点から考察してみたい。一つは、フォーサイスの *Positive Preaching and Modern Mind*（1907）という書物の全体の文脈から見た場合であり、もう一つは、彼が回心の体験を語った箇所の前後の文脈から見た場合である。第一、全体の文脈から見た場合。ハンターによれば、フォーサイスは自分の変化についての詳細を何度も語らなかった[13]。それゆえ、大部分の研究者はフォーサイスにおける回心という出来事の詳細を上記の書物に大分依存している傾向がある。驚くべきことは、その書物の全体の文脈においても、彼の趣旨は「神の恩寵」という理念に集中する点である。言うまでもなくその書物の関心事は説教であるが、それの重荷をどこに置くかが鍵である。フォーサイスにおける説教の重荷は、ハンターによれば、「神の恩寵[14]」である。さらに、その書物が七つの主著の一つであるということを勘案する時、彼がどれほど神の恩寵という理念を重要視したかが明らかになる。第二、回心という体験を語った箇所の前後の文脈から取る場合であるが、前後を注意深く読めば、新しい人間として恩寵の理念を回復しようとする旨を読める。「新しい人間」、「恩寵における経験的な（experimental）宗教」という言葉がそれを反映している。回心の体験を語るすぐ前に、彼は神学する人間、つまり新しい人間について述べる。「信仰から推論される二次的な神学があり、信仰の本質から生まれる第一義的な神学がある。この偉大で第一義的な神学を扱う条件が新しい人間（new man）である[15]」、と彼は言う。ここで新しい人間というのは、キリストを審判者として取り扱い、先に人間を知ってくださるお方としてキリストを知り、御霊から捜し求められている者としてキリストを捜し求める新しい人間を意味する。また、「恩寵における経験的な基盤[16]」のない宗教が批評学（criticism）に直面すると、フォーサイスによれば、パ

ニックになる。このような二つの観点から、彼が上記の著作を通して十字架における神の審きすなわち「恩寵の感覚の回復」と、「聖性の感覚と罪の感覚の更新」[17]を強調する者に変えられたと受け止められる。

ブラッドリは、*P. T. Forsyth* (1952) という書において、フォーサイスにおける知的背景について述べている。彼によれば、フォーサイスはモリス (Maurice) やリッチュル以外に多くの人々から神学的洞察を受けた[18]。ボールドウィン・ブラウン (Baldwin Brown)、デール (Dale)、フェアベアン (Fairbairn)、ケーラ (Kähler) などの名をあげることができよう。また、フォーサイスの初期の神学において、大きな影響を与えたモリスやリッチュルを訂正することについて、ブラッドリはそれをフォーサイスの「個性」(individuality)[19]として見なした。他の神学者とは違ってフォーサイスは多くの人々から神学的関心事をたくさん摂取したが、フォーサイスを折衷主義者としてでなく、真理に対する彼の注意深い熟考と不断の探求の結果として分析したであろう。ブラッドリによれば、特定の著者の理念がフォーサイスに印象を与えれば、彼は権威の原理の下で「自分の経験に一致する」ものを摂取した[20]。「自分の経験に一致する」という言葉には一定の価値があると思われるが、ブラッドリには不十分さがある。というのは、フォーサイスにおける回心という体験を抜きにしたからである。フォーサイスが *Positive Preaching and Modern Mind* (1907) という著作において、他の人々のものをどう受け入れるかといういわゆる基準を見れば明らかである。フォーサイスは、「常に聖霊によって正され、打ち破かれた」[21]、のである。このような姿勢は、ブラッドリの言う「個性」より、はるかに大きい「回心」という恩寵の体験の結果である。

それでは、フォーサイスの告白を聞いてみよう。彼自身の告白、言わば「恩寵の告白」(confession of grace) というものは、彼が恩寵の使徒であるという確信を与える。彼は、一九〇五年イングランド・ウェイルズの会衆派同盟議長として、「教会における道徳的権威としての福音の恩寵」という題目の講演をした。それは、*The Church, The Gospel and Society* (1962) という題目の書として出版された。この書物には、ハンターによれば、円熟なフォーサイスの神学的洞

察が表れ、フォーサイスの真髄（quintessential）が見出される。[22] フォーサイスはその書物の一章を割いて恩寵の告白に対する必要性を強調する。聖書の御言葉と神の恩寵に捕われたフォーサイスの謙虚の姿を、そこから発見することができる。「聖書の全ての精髄は、……神の恩寵をもってわたしを安定させ（settle）・静める（still）。聖書はわたしのために偉大な働きを行なわれた」[23]、と彼は述べる。ここで彼は、聖書を恩寵の歴史的な手段としてみなしている。聖書の精髄を通して「神の恩寵」に捕らわれていたことに違いない。「わたしは、歴史的贖罪におけるわたしの岩、わたしのリアリティー、わたしの永遠の命を発見した」[24]、とフォーサイスは言う。

それゆえわれわれは、フォーサイスの回心の結果に対するロジャーズ（John H. Rodgers）の言及を評価する。ロジャーズは *The Theology of P. T. Forsyth: The Cross of Christ and the Revelation of God*（1965）という書において、フォーサイスの回心に対する神学的一転を述べる。「神の御手は彼の生涯にもっと直接的に・劇的に到達した。……彼は自由主義を越えて恩寵の神学の回復へ押された」[25]、と。陳腐な・空想的な神学でなく、命という道徳的性質と永久的に関係がある神学つまり「聖なる恩寵の中で生まれて結末をつける神学」[26]を、フォーサイスは必要とした。それゆえ、ロジャーズの言葉を借りれば、フォーサイスは「恩寵の使徒」（an apostle of grace）[27]と呼ばれるに十分である。

二　インディペンデンシーの影響

まず、インデペンデントというのはどういう人々を示しているかを見よう。大木英夫教授は『ピューリタニズムの倫理思想』（一九六六年）という著作において、インデペンデントについて詳しく述べている。大木教授によれば、インデペンデントは、初期ピューリタニズムの政治的改革運動の挫折から生じた改革派的歴史観と宗教改革の実践との結び

つきの破れの中から出てきた、ピューリタン・グループである。[28] 大木教授が『新しい共同体の倫理学――基礎編　下』（一九九四年）という書において、「歴史的に「インデペンデント」と呼ばれたコングリゲーショナリズム」[29]について述べられている書物、それは何であろうか。それはフォーサイスの一九一二年の著作 *Faith, Freedom, and the Future* という書物である。「この小さい書に述べられていることは、この至高の題目……偉大な教会と西欧の歴史における一つの要素として見られたインディペンデンシーの成立と特質の具体的な例証である」[30]、とフォーサイスは言う。彼はその著作を通して、二十世紀を支配するためには、英国の偉大な伝統つまり十七世紀のインデペンデントに向きを変えなければならないことを主張した。彼の神学の闘いは、近藤勝彦教授が『福音の神学と文化の神学』において述べているように、「近代的自由とデモクラシーの成立に決定的な影響を与えたピューリタニズム、つまりインディペンデンシー（独立派）の伝統の中で、その再建を目指しての奮闘であった」[31]。この闘いの路線を、フォーサイスは次のように明らかにする。彼は教義学者たちより、クロムウェル、ミルトン、トマス・グッドウィンに思想的に傾斜して、「わたしたちは視野（horizon）と高揚（lift）を持ってこのような人々の思想の中に向かわなければならない」[32]、と述べる。ここで教義学者というのは、西欧の全教会と全歴史において自分が置かれている場所に対する偉大な感覚を失われた十八世紀の人々を示す。フォーサイスが関心を置いた人々とは、インディペンデンシーの精髄を持っているクロムウェル、トマス・グッドウィン、オウエンである。

まず、フォーサイスにおけるインディペンデンシーの影響について、今までの研究者たちの成果をみよう。このようなテーマに対して、彼らの研究の成果はどれぐらいあるのであろうか。一言で言えば、皆無の状態ではないかと思われる。ブラッドリが *P. T. Forsyth*（1952）という書において、他の人々に比べれば少し深いレベルで述べる程度であろう。ブラッドリは、フォーサイスの言う「神の聖性」[33]という理念に対する神学的モチーフを、トマス・グッドウィンからであるという仮定を立てる。フォーサイスはその時代の他の神学者たちと異なって神の聖性を強調したが、この「聖性」

とか「選び」という神学的理念をトマス・グッドウィンからはじめて洞察を受けたという見解である。ブラッドリは、「フォーサイスがこの思想家（トマス・グッドウィン）を彼の後期の著作でたびたび引用する事実と、エペソ人への手紙の解説を触れるのは、次の仮定を信頼できるものにする。その仮定とは、フォーサイスが彼の神学の重大な面（聖性）において初めての洞察をグッドウィンから受けたということである」[34]、と述べる。このような仮定を立てたが、ブラッドリは推測で終わる。「このテーマ（神の聖性）において彼の関心の発展をたどることはたぶん不可能であるが、この主題で精神がフォーサイスのものと一番近い著者はグッドウィンである」、と。ブラッドリも他の研究者たちと同じように、フォーサイスに対するインディペンデンシーからの影響を過小評価したことに違いない。

では、フォーサイスがインディペンデンシーの伝統をどのように解釈しているかを考察しよう。「インディペンデンシーの源泉はカルヴァン主義であり、その傾向は再洗礼派であり、その土壌はイングランド国民性であった。その歴史的な源泉は、ピューリタニズムを通したカルヴァン主義であった」[35]、とフォーサイスは言う。カルヴァンを父と、再洗礼派を母としないインディペンデンシーもあるわけであるが、彼はこのようなものについては排他的である。というのは、これらが使徒的継承と福音的基盤、そして再生させる環境（regenerate atmosphere）を失ったからである。フォーサイスによれば、こういうのは、クロムウェル、トマス・グッドウィン、ロビンスンのようなインディペンデンシーではない[36]。彼が徹底的にクロムウェルとトマス・グッドウィンに傾斜している理由は、彼の関心事が真の教会と、神学にあると考えられる。フォーサイスが *Faith, Freedom, and the Future*（1912）という著作において何回も強調するのは、インディペンデンシーの関心がドグマでなくポリティー（polity）であるということである。彼は、「インディペンデンシーはドグマよりポリティーにもっと関係を持ち、その関心は教会を通して純粋な教理でなく福音を通して真の教会（true church）に関心を持つ[37]」、と言う。そして、インディペンデンシーは歴史を持つ魂の宗教として、歴史の上で成長・発展する。そこに神学の働きがある。彼は言う。「インディペンデンシーは、積極的・経験的な土壌、つまり福音

的体験において定着され、そこから成長した。……それは神学に生ける気迫（living soul）を与えた。……神学は個人の信仰の写し（transcript）であり、聖徒たちの生けるあつまりの中で発展した[38]」、と。

このインディペンデンシーの伝統をフォーサイスは誰から継承しようとしたのであろうか。精神の面と神学の面という二つの側面を考慮する時、フォーサイスが精神（spirit）の面においてはクロムウェルから、神学の面においてはトマス・グッドウィンから継承しようとしたと考えられる。第一、精神の面に対してみよう。クロムウェルの神学は単純であったと思われるが、*English Puritanism and Its Leaders: Cromwell Milton Baxter Bunyan*（1861）という書を書いたタラク（John Tulloch）は、クロムウェルの中からピューリタニズムの精神を発見した[39]。「それゆえクロムウェルは死んで失敗した（あるものは失敗して死んだと言うであろうが）。それにもかかわらず彼の精神は永久にインディペンデンシーに移った（pass into）。……インディペンデンシーの抜群の人物はクロムウェルであった[40]」、とフォーサイスは述べる。勿論、フォーサイスは単純にクロムウェルの人格だけを念頭にいれたのではない。トマス・グッドウィンとオウエンのような人々との関係においてのクロムウェルを、彼は意識したと考えられる。次に、トマス・グッドウィンから神学的な面を継承しようとした点をみよう。「（オウエンとグッドウィンのことを考えると）、中世的・形而上学的なものからの神学は精神において近代的・心理的なものになった[41]」、とフォーサイスは述べる。古い形式が残っているにもかかわらず新しい近代的な傾向を、彼はトマス・グッドウィンとオウエンから見出すのである。しかし、フォーサイスはこの二人の神学的特性を見逃してはいない。彼は言う。「それ（インディペンデンシー）が神学的である限り、それは（オウエンとロビンスンと共に）カルヴァンから借りた点で組織的（systematically）であるか、またはキリスト教を（クロムウェルとグッドウィンと共に）キリストの贖いの贖罪という形成力ある経験をする点において経験的（experimentally）である[42]」、と。彼はトマス・グッドウィンの神学から、恩寵による経験的なモチーフを発見するのである。フォーサイスの鋭い洞察である。というのは、ロイド・ジョウンズ（D. M. Lloyd-Jones）も、*The Puritans:*

Their Origins and Successors (1991) という書において、この事実を認めているからである。伝記作家の言葉であると思われるが、ロイド・ジョウンズは述べる。「彼（トマス・グッドウィン）は、経験に基づいて（experimentally）説教した。なぜなら、彼は良い命の言葉を感じ（felt）、これを経験（tasted）し、これに手を触れた（handled）ように説教したからである。……神は神の恩寵の言葉に対する証言（testimony）を与えた」[43]、と。このようなトマス・グッドウィンの神学的特性、つまり経験に基づいた特性は、フォーサイスの主張するところと一致する。フォーサイスが一九〇五年の講演の中で「神学は経験的でなければならない」[44]と述べたことと、既述したように「恩寵における経験的な基盤」[45]の宗教という言葉は、それを表している。フォーサイスがトマス・グッドウィンに傾斜した理由は、この恩寵の経験に基づいた神学の性格であった。

トマス・グッドウィンは、大木教授によれば、インデペンデントの最も代表的な牧師である。[46] フォーサイスは、トマス・グッドウィンをどのように評価しているのであろうか。代表的な評価は次の表現であろう。彼はトマス・グッドウィンを、「わたしたちの告白に属する使徒と大祭司」(the apostle and high priest of our confession)[47] として名づける。何が、このような表現を可能にしたのであろうか。そこにはトマス・グッドウィンの持つ神学的真理と霊的真理が考えられる。フォーサイスによれば、神学は生きているものでなければならないし、命の告白を伴うものとして、永遠のものに対する教会の経験の産物としての真理でなければならない。[48] フォーサイスはトマス・グッドウィンからこのような神学的真理を得た。彼は、トマス・グッドウィンの書物から「劇的荘厳と情熱的親密感」[49]を得たと述べる。ハンターの表現を借りれば、「気品のある音楽の旋律のように記憶の中で生き残っている名句」[50]が満ちている、四つの例を挙げてみたい。第一は、「選び」に対する説教である。フォーサイスにとって、これは崇高なものである。第二は、エペソ人への手紙の説教である。フォーサイスに言い表せない愛情を与えた説教である。第三は、「国家と王国に対する偉大な関心」(*The great interest of states and kingdoms*) という題の説教である。フォーサイスは堂々したものとして評価して

いる。第四は、聖霊の働きに関する論文集第九巻四章である。フォーサイスはここから感動的・想像力に富むトマス・グッドウィンの思想と接することができたであろう。これらの四つのものがトマス・グッドウィンの書物から得た神学的真理に相当するならば、霊的真理の面では次のものが考えられる。「悲しい告別に」という一句から得る洞察であるが、「最初にこれを読んで以来、この一句は五つの宝石のようにわたしの記憶から燃え続け、シューベルトのモチーフのようにそこで反響した」[51]、とフォーサイスは述べる。彼は、このようにトマス・グッドウィンの書物から神学的真理と共に霊的真理を発見した。それゆえ、トマス・グッドウィンは使徒と大祭司として、フォーサイスの告白の中で生きていた。

それでは実際的にフォーサイスがトマス・グッドウィンからどういう神学的モチーフを得たかについて考察してみよう。そのために、彼が高く評価するトマス・グッドウィンの説教の中で、堂々たる（stately）説教として評価した「国家と王国に対する偉大な関心」という説教と、エペソ人への手紙の註解書の説教、二編をとりあげてみよう。

まず、「国家と王国に対する偉大な関心」という説教である。この説教は、フォーサイスに公共的関心（public interest）というモチーフを与えたと見られる。この説教は詩編第一〇五篇14、15節、「主は人の彼らをしえたげるのをゆるさず、彼らのために王たちを懲らしめて、言われた、「わが油そそがれた者たちにさわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない」と」、を本文とする。トマス・グッドウィンは総二七頁にわたって、旧・新約聖書の歴史上に現れた大小王国の興亡を語る。この説教を注意深く読むならば、以下三つの重要点を得ることができる。第一は、関心（interest）の所在である。その王国の繁栄あるいは破滅は、王と国が神の聖徒をどのように扱ったかによる。トマス・グッドウィンよれば、その国の繁栄と破滅は、君主と国民の関心が「聖徒たちの取り扱い方に依存する」[52]。第二は、聖徒たちを保護する（preserve）キリストの関心である。「悪魔の王国の大きな関心は、イエスの誡めを守る人々を迫害することであるが、イエス・キリストの王国の偉大な関心は彼の聖徒たちを保存し、彼らを害するものを困

惑させることにある。なぜなら彼は聖徒たちの王であるからだ」[53]、と。第三は、トマス・グッドウィンが住んでいた王国、イングランドへの関心である。「イングランドは、主イエス・キリストという高価な宝石、世界においてどの王国と関係する偉大な宝物を持つ国である」[54]、とトマス・グッドウィンは述べる。また、ヨハネの黙示録第十七章十四節、「小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たち」という御言葉をイングランドに適用させ、イングランドに対する関心を持続し、保存することを議員たちに要求した。「イングランドの聖徒たちはイングランドの関心である」[55]。これは、トマス・グッドウィンが言おうとした言葉であろう。この説教の中で重要なのは「関心」という言葉である。この用語は、フォーサイスにおける公共的関心とつながっていると考えられる。というのは、フォーサイスが *The Christian Ethic of War* (1916) という著作において、トマス・グッドウィンの言葉と関連づけながら「公共的関心」を示しているからである。フォーサイスによれば、「敬虔な人々は公共的精神 (public spirit) を持つ」、というのはトマス・グッドウィンの言葉である。が、フォーサイスはさらに進んで、「キリスト者はこの関心の中に人生をかける」[56]、と述べる。それゆえ、フォーサイスの言う「パブリック」(public) という神学的洞察は、トマス・グッドウィンから得た可能性が最も高い。

次に、考察したいのは、エペソ人への手紙の註解書にある説教である。フォーサイスはこの説教から自由な恩寵というモチーフを得たと思われるが、この詳細について考察してみよう。ブラッドリによれば、フォーサイスはこの註解書から神学的洞察を得た[57]。フォーサイスは、トマス・グッドウィンの「エペソ人への手紙の十一番目の説教と十九番目の説教に言い表せない愛情[58]」があった、言う。ここで十九番目の説教とは、エペソ人への手紙第二章七節、「それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜った慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった」を本文とする説教であると思われる。というのはこの説教が、われわれの注目する「神の恩寵」について説教するからである。トマス・グッドウィンは、ここにおいて何を語ったのか。彼の言葉を借りれば、全体の解釈はこうである。

「ここで使徒は、人間の救いにおける神の目的を、それが神ご自身の栄光、特に神の恩寵の栄光を反映し、かつそれに敬意を表す」[59]、と。ここには六つの観察があるが、次のようにまとめられる。人間の救いにおける神の最大の目的は、ご自身の中にあるものをあらわすことであり、特にご自身の恩寵をあらわして、あがめられることをしらせることである。また、神があらわすことを望む最高のものは、ご自身の恩寵の豊かさであり、わたしたちを救う至高の目的はご自身の恩寵の豊かさをあがめることである。ここで特に注目を要するのは、神の恩寵の中にある至高の卓越性である[60]。トマス・グッドウィンはこの至高の卓越性を、「赦すこと」(forgiving)と「与えること」(giving)における神の寛大さ(bounty)と惜しみない施し(liberality)から見出す。特に、与えることにおいて、神はあらゆる方法を自由に与え、「恩寵の自由」は恩寵の豊かさであるという言及は興味深い。

フォーサイスはこの説教からどのような神学的洞察を得たのか。それは「神の恩寵」という理念であると考えられる。その理由は、以下三つあげられる。第一は、彼がその註解書の前提(premise)を理解していた点である。第二は、彼が恩寵という理念を、彼の時代に回復したという点である。第三は、彼が曲げられた恩寵の理念と戦ったという点である。第一の点に関してはその註解書の前提を見よう。トマス・グッドウィンは言う。「もしキリスト教の審判が、イエス・キリストのみを通して神の自由な恩寵と永遠の愛と贖罪(redemption)にうまく基づいているならば、また神の聖霊の最も霊的内的働き(operations)に基づいているならば、それは全ての誤りを防御することができる[61]」、と。彼が神の自由な恩寵に基づいていることを示している。第二の点、恩寵という用語を回復したことに関しては、ロジャーズが次のように述べている。「彼(フォーサイス)の同時代の人々に対して「恩寵」という用語を回復したのはフォーサイスであった。他の人々が神の愛に触れた時、フォーサイスは神の恩寵、聖なる恩寵に触れた[62]」、と。第三は、曲げられた恩寵の概念と戦ったことであるが、フォーサイスの時代、教会の中には恩寵の概念について二つの大きな曲げられた傾向があった。非人格的な力もしくは善としての恩寵と、センチメンタルな愛としての恩寵という傾向である。ロ

ジャーズによれば、フォーサイスはこの二つの傾向と戦った。[63]

既に考察してみたように、恩寵の体験によってフォーサイスは「愛を愛するものから恩寵の対象へ方向を変えられた」、という告白ができた。彼はインディペンデンシーの伝統を生かすために、恩寵という経験に基づいた神学者トマス・グッドウィンを注目した。それゆえわれわれは、フォーサイスとトマス・グッドウィン、この二人の神学の接点が「神の恩寵」にあったと言わざるを得ない。

三　恩寵の神学

われわれは、フォーサイスが恩寵の神学を回復しようとしたという見解を持つロジャーズを評価する。フォーサイスの言う恩寵という理念に対するロジャーズの見解は、比較的に恩寵の基盤の上で立っている。しかし、ロジャーズの *The Theology of P. T. Forsyth* (1965) という書においては、ピューリタニズムの研究が行われていない重大な欠点が見られる。われわれは、フォーサイスの神学的モチーフに内在している恩寵の理念をピューリタンの伝統から見なければならない。ここでは、フォーサイスがピューリタンの伝統から特に「恩寵」と「服従」という理念を回復しようとした点と、またこれらがトマス・グッドウィンのものと類似している点に注目しながら考察してみたい。

まず、ピューリタンの伝統、つまり神の恩寵を取り戻そうとしたことからはじめよう。フォーサイスは *The Church, The Gospel and Society* (1962) という書の終わりのところで、偉大なピューリタンの伝統を復興する必要性を述べる。ギリシャの恩寵もあれば、イスラエルの恩寵もある。フォーサイスが要求するのはイスラエルの恩寵である。古ピューリタンたちは、彼らの神学を持ってこの恩寵を求めたであろう。また、彼らは道徳的贖罪という宗教心、つまり最も

自由な・高価な福音のみを持って物事の中心に立った。彼らは、神をキリスト教の神とするもの、つまり自由な恩寵(free grace)だけでなくまた高価な恩寵もしっかり握った。「彼らはもっと恩寵を所有していた(owed)」[64]、とフォーサイスは言う。彼がどれほど正しくピューリタニズムを把握したか、この一語に凝縮している。彼の鋭い神学的洞察がここにある。大木英夫教授は、『ピューリタニズムの倫理思想』において、ピューリタンの宗教について述べる。「ピューリタンの宗教は恩寵宗教である」[65]、と。「恩寵宗教」というこの言葉から、われわれは、フォーサイスがピューリタンの正しい伝統に立っていると確信することができる。この伝統の上に立って、彼はピューリタンの力(power)つまり恩寵における力を回復しようとしたのである。彼が強調するのも、この「力に復帰する(regain)」[66]ためには何をすべきかである。大木教授は、恩寵における力について述べる。「恩寵とは、ピューリタンにとって、罪人として無力なる人間をば神との契約のパートナーとして確立するところの力なのである」[67]、と。ピューリタンにとって恩寵は力として理解されうるが、フォーサイスにとっても同じように言えるのであろうか。この問いに対してハンターは明確な答えを与える。フォーサイスの著作*Positive Preaching and Modern Mind*(1907)という書には、説教者の重荷について多くのことが語られている。ハンターは、フォーサイスの言う説教の重荷から神の恩寵を発見するだけでなく、恩寵が力と結びついていることも発見するのである。「説教の重荷は、神の恩寵――わたしたちの罪にもかかわらず、神がわたしたちを不相応に、無償で赦し、贖われた――であって、教理または約束としてでなく、神の行為と力として理解された恩寵である」[68]、とハンターは述べる。これで、フォーサイスの言う神の恩寵の理念がピューリタンのものと一脈相通じることが確認されたと思われる。フォーサイスが取り戻そうとしたのがこの力である。この恩寵という神の力を取り戻すために、彼はピューリタンの伝統を回復しようとしたのである。ピューリタンと同じ泉からくみ上げ、彼らと同じ中心に立ち戻らなければならないということを要求しながら。その中心とは何か。「恩寵の贖罪であり、それを毎日自分のもの(appropriation)にすることである。これがキリスト教の軸であり、それを保護するものである」[69]、と彼は述べて

いる。

それでは、「自由な恩寵」という理念に関して、トマス・グッドウィンとフォーサイスのものを比較してみよう。宗教改革の唯一の働きは、フォーサイスによれば、神の自由な恩寵を回復することである。[70] この線上に立つトマス・グッドウィンの言う自由な恩寵という理念を先にみよう。既に考察してみたエペソ人への手紙の説教は、われわれに重要な手掛かりを提供する。トマス・グッドウィンはこの説教において、「神の恩寵は自由に与えることに示しており、恩寵の自由は恩寵の豊かさにある」[71]、と述べる。「自由に与える」という思想が説教の中には溢れている。「赦すことと与えることの両方において、恩寵の優越性がこのように示されるように、神はあらゆる点を自由に与える。したがって皆さんは、自由（freeness）が恩寵の至高の優越性であるということを知らなければならない。つまり恩寵の自由は恩寵の豊かさである」[72]、と彼は言う。神が与えるという点において、その頂点はキリストにあるが、トマス・グッドウィンは「与える」ということをよく表している。「神は与える（give）御子をもつ。神は計画をたてる。神は言う。わたしは彼を与え（give）、彼を贈り物とするための最善の仕方において彼を与え（give）、彼を十字架につけるために与え（give）、……あなたがたのために彼を与える（give）であろう、と。ここに、恩寵の豊かさがあるのではないか。あなたがたが彼を所有する時、あなたがたは彼と共に自由にすべてを所有するであろう」[73]、と。自由な恩寵の豊かさが、「与える」という一語に凝縮している。では、フォーサイスの言う自由な恩寵という理念はどうであろうか。彼は *The Principle of Authority*（1913）という著作において自由な恩寵の概念を述べる。「神の自由な恩寵とは、神の前（すなわち、どん底（at bottom））にわたしたちは権利を持っていないことを意味する」[74]、と。言い換えれば、わたしたちが持っているものはすべてもらったもの、神が与えたものであるという意味である。このようにフォーサイスの場合においても、恩寵という理念の中に神が与えるという思想がある。フォーサイスは上記の書において、全教会が告白すべき信条を企てているが、そこでも神が与えるという思想が濃厚である。彼は、序文には「神の恩寵のメッセージ」を、その実体には神の

自己贈与（self-donation）或いは与えるということを入れようとする。どのように人類が正しい裁判官の前に立つのか。どのように人間は聖なる神と正しくなるのかという問いを出すが、最もわれわれに重要なことは、彼がその信条の条項の中に入れようとする「聖なる恩寵」ということである。彼は言う。「聖なる恩寵は、……罪深い人間に対する神の自己贈与である。……神はご自身を与える。したがって、聖なるお方はそこにおいてのみ贖い主である」[75]、と。このようにフォーサイスも自由な恩寵という理念に「神が与える」という思想を入れた。この点において、フォーサイスはトマス・グッドウィンと親近性を持つ。

次に、「服従」という理念をみよう。ピューリタンの偉大な伝統を復興するために彼は、「ピューリタンの英雄的行為（heroism）ではなく、ピューリタンの謙虚（humiliation）を共有すること」[76]を強調する。この謙虚という言葉に一種の服従する姿が見えるが、われわれはより根本的に考えなければならない。大木教授は、『ピューリタニズムの倫理思想』において、「服従」という理念について述べている。「この新しい契約の中にとりいれた人間は、神の誡命に「新しい服従」をささげ得る可能性をもつのである。その可能性を神は人間に与えておられる」[77]、と。「あたえておられる」という言葉は意味深い。服従というものをその根本から考えている表現であると思われる。それゆえ、神は人間に服従を要求し、人間は服従することができるであろう。フォーサイスの一九一七年の講演をまとめたものの中に、*Congregationalism and Reunion*（1952）という題の書物がある。ここにおいて彼は、服従という理念を神からの要求として理解している。「神は服従、つまり生ける信仰である服従を要求している」[78]、とフォーサイスは述べる。神は服従を要求するため、人間は服従しなければならない。彼は*The Principle of Authority*（1913）という著作において、服従について述べる。「それゆえキリストに服従することは、自由になることよりもっと良い。つまり服従することは、永遠に、個人的に、社会的に自由になるための唯一の道である。そのような服従なしに自由は呪いである。絶対的な（*absolute*）服従は完全な（*entire*）自由の条件である」[79]、と。服従することによって、そこから完全な自由を得るという

すばらしい思想である。彼は服従という理念についてもトマス・グッドウィンとの関連を忘れていない。というのは、彼が霊的自由に満ちた人々の一人としてトマス・グッドウィンの名をあげるからである。フォーサイスは上記の書において、「霊的自由のすばらしい（golden）羽をアウグスティヌス、……グッドウィンに広げたものよりほかのものが、今日あるのだろうか」[80]、と述べる。トマス・グッドウィンとの親近性がここにもある。フォーサイスは、「自由な恩寵」の理念だけでなく、「服従」という理念においても、ピューリタンの伝統に立っている。それゆえ、われわれは服従という理念に関するロジャーズの健全なまとめ方を評価する。ロジャーズは *The Theology of P. T. Forsyth*（1965）という書において、服従について健全にまとめている。ロジャーズは言う。「聖なるものとしての神は、実存（existence）のすべての様式（mode）と表現において人間そのものの自身（man's self）をあるがまま要求（claim）し、人間の行為（conduct）を要求する（demand）。聖なる神への応答は信仰の服従であり、そしてこの服従は人間の全実存と、それによる彼の行為の決断である」[81]、と。ピューリタンの信仰を「全人的な行為」[82]、「全存在的な肯定」として見なしている大木教授によれば、ロジャーズのこの表現は典型的なピューリタンの思想である。したがって、フォーサイスの言う絶対的服従というのもピューリタンの伝統の上に立って述べた言葉である。

以上、われわれはフォーサイスが神の恩寵と服従という神学的モチーフからピューリタンの伝統を復興しようとしたことについて考察した。ピューリタンの恩寵と服従という理念は、恩寵の神学の一部になった。

結び

一般的に知られていたフォーサイスに対するイメージはリッチュリアンであったかも知れない。しかし、フォーサイ

スには今まで隠されていた新しいイメージがあった。われわれはこれを発見するために、多くの研究者たちが沈黙していた分野、つまりピューリタンの伝統という光を照らしてみた。大木英夫教授が指摘するように、フォーサイスは会衆派教会の牧師としてピューリタンの影響を受けなかったと考えることはできないからであった。

われわれが考察してみたことから次のような結論を出すことができる。第一、フォーサイスは回心という恩寵の体験によってリッチュリアンというタイトルを放棄した。第二、インディペンデンシーからの影響として、フォーサイスはトマス・グッドウィンから強い影響を受けた。すなわち、トマス・グッドウィンは神の恩寵という神学的モチーフをフォーサイスに与えた。第三、フォーサイスは、ピューリタンの恩寵の神学を回復しようとした。特に、フォーサイスの言う神の恩寵という理念は、トマス・グッドウィンのものと親近性を持っている。

結論的に、フォーサイスの神学はピューリタンの恩寵の宗教に立脚した「恩寵の神学」であり、彼は「恩寵の使徒」である。ロジャーズが *The Theology of P. T. Forsyth* (1965) という書を次の言葉で締め括っているように、われわれの結論もそうである。「フォーサイスを読むことは、単純に多くのことを学ぶのでなく、フォーサイスを恩寵の使徒 (an apostle of grace) とした彼 (キリスト) に導かれることである」[83]、とロジャーズは言う。

注

(1) T. Hart (ed), *Justice the True and Only Mercy: Essays on the Life and Theology of Peter Taylor Forsyth*, T&T Clark, 1995, p.ix.

(2) A. M. Hunter, *P. T. Forsyth: Per Crucem ad Lucem*, SCM Press, 1974, p.12.

(3) W. L. Bradley, *P. T. Forsyth: The Man and His Work*, Independent Press, 1952, p.106.
(4) Robert McAfee Brown, *P. T. Forsyth: Prophet for Today*, The Westminster Press, 1952, pp.30-1.
(5) 一九一〇年の著作 *The Work of Christ* において、リッチュルを訂正する傾向が見られる。P. T. Forsyth, *The Work of Christ*, Independent Press, 1952, pp.228-9. また、ブラッドリによれば、デール（R. W. Dale）と親しい関係になってから初めて、リッチュル主義を放棄する傾向が見られる。Bradley, op. cit., p.101.
(6) Hart, op, cit., p.29.
(7) 大木英夫『ピューリタン』中央公論社、一九六八年、一七四頁。
(8) Hart, op. cit., p.x. 原文には、一八八七年の説教となっているが、一八七七年が正しい（cf. Hart, op. cit., p.17.）。
(9) Hart, op. cit., p.17.
(10) Ibid.
(11) P. T. Forsyth, Positive Preaching and Modern Mind, Hodder and Stoughton, 1907, pp.282-3（以下 *Preaching* と略記）.
(12) Hart, op.cit., p.17.
(13) Hunter, op. cit., p.17.
(14) Hunter, op. cit., p.23.
(15) Forsyth, op. cit. *Preaching*, p.281.
(16) Op. cit., p.283
(17) Op. cit., p.284
(18) Bradley, op. cit., p.90.
(19) Bradley, op. cit., p.91.
(20) Ibid.
(21) Forsyth, op. cit., Preaching, p.285.
(22) Hunter, op. cit., p.23.
(23) P. T. Forsyth, *The Church, The Gospel and Society*, Independent Press, 1962, p.125（以下 *Society* と略記）.

(24) Op. cit., p.127.
(25) Rodgers, op.cit., p.6f.
(26) Forsyth, op. cit., Society, p.117f.
(27) Rodgers, op.cit., p.264.
(28) 大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』新教出版社、一九六六年、三二九頁（以下『倫理思想』と略記）。
(29) 大木英夫『新しい共同体の倫理学――基礎論　下』教文館、一九九四年、八七頁。
(30) P. T. Forsyth, Faith, Freedom, and the Future, Hodder and Stoughton, 1912, p.xiv（以下 *Freedom* と略記）.
(31) 倉松功・近藤勝彦編『福音の神学と文化の神学』教文館、一九九七年、一六二頁。
(32) P. T. Forsyth, op .cit., pp. 346-7. ジョン・グッドウィンという同時代の人がいるので、混乱を防ぐために以下、トマス・グッドウィンと表記する。
(33) *Scottish Journal of Theology*（1999）において *Justice the true and Only Mercy* という書の書評を書いたDonald G. Bloesch によれば、フォーサイス神学のモチーフは神の聖性に焦点を置いている。*Scottish Journal of Theology*, vol. 52, No. 2,（T&T Clark 1999), p. 239.
(34) Bradley, op. cit., p.102f.
(35) Forsyth, op. cit., p.49. cf. 大木英夫『倫理思想』、一〇〇頁。
(36) Op. cit., p.121.
(37) Op. cit., p.114f.
(38) Op. cit., p.115.
(39) John Tulloch, *English Puritanism and Its Leaders: Cromwell Milton Baxter Bunyan*, William Blackwood and Sons, 1861, p.158.
(40) Op. cit., p.112. cf.「一六五八年、グッドウィンと彼の友達は、教会会議を開いて信仰告白を作成する自由を請願した。クロムウェルは不承不承の承諾を与えた」。*Dictionary of National Biograpy*, Oxford University Press, 1973, p.149, Vol.viii. バカン（John Buchan）によれば、トマス・グッドウィンは病室でクロムウェルのために祈った。John Buchan, *Oliver Cromwell*, Hodder and Stoughton, 1967, p.535.

(41) Forsyth, op. cit., p.116.
(42) Op. cit., p.138.
(43) D. M. Lloyd-Jones, *The Puritans: Their Origins and Successors*, The Banner of Truth Trust, 1991, p.388.
(44) Forsyth, op.cit., *Society*, p.117.
(45) Forsyth, op. cit., *Preaching*, p.283.
(46) 大木英夫『倫理思想』、三三〇頁。
(47) Forsyth, op. cit., *Freedom*, p.118.
(48) Op. cit., p.117.
(49) Op. cit., p.117.
(50) Hunter,op.cit.,p.23.
(51) Forsyth, op.cit., p.118.
(52) Thomas Goodwin, *The Works of Thomas Goodwin*, Tanski Publications, 1996, Vol.12, p.51f.
(53) Op. cit., p.54.
(54) Op. cit., p.56.
(55) Op. cit., p.57.
(56) P. T. Forsyth, *The Christian Ethic of War*, Longmans Green, 1916, p.13.
(57) Bradley, op. cit., p.103.
(58) Forsyth, op. cit., *Freedom*, p.117.
(59) Thomas Goodwin, *The Works of Thomas Goodwin*, Tanski Publications, 1996, Vol.2, p.281.
(60) Op. cit., p.288.
(61) Thomas Goodwin, *The Works of Thomas Goodwin*, Tanski Publications, 1996, Vol.1, p.4.
(62) Rodgers, op. cit., p.258.
(63) Ibid.

(64) Forsyth, op. cit., *Society*, p.122.
(65) 大木英夫『倫理思想』、一八八頁。
(66) Forsyth, op. cit., p.122. cf. 大木英夫教授は言う。「恩寵（Grace）を罪人を赦す神のあわれみ（mercy）とみるか、罪人の罪を内的に克服する力（power）と理解するかということはプロテスタンティズムにおける宗教性の相違を生み出す」（大木英夫『倫理思想』、一九一―二頁）、と。
(67) 大木英夫『倫理思想』、一八三頁。
(68) Hunter, op. cit., p.23.
(69) Forsyth, op. cit., p.122. フォーサイスは恩寵の教理と贖罪の教理を同一視する。
(70) Op. cit., p.124.
(71) Goodwin, op. cit., Vol.2, p.290.
(72) Ibid.
(73) Goodwin, op. cit., Vol.2, p.289f.
(74) P. T. Forsyth, *The Principle of Authority: In Relation to Certainty, Sanctity and Society*, Independent Press, 1952, p.254（以下*Authority*と略記）.
(75) Forsyth, op .cit., pp.258-9.
(76) Forsyth, op. cit., *Society*, p.122.
(77) 大木英夫『倫理思想』、一八六頁。
(78) P. T. Forsyth, *Congregationalism and Reunion*, Independent Press, 1952, p.38.
(79) Forsyth, op. cit., *Authority*, p.272.
(80) Op. cit., p.272f.
(81) Rodgers, op. cit., p.35. ロジャーズは「恩寵」の理念を次のように健全にまとめている。ロジャーズは言う。「恩寵は赦すだけでなく服従と奉仕の生のために人間の全生涯を要求し人間を更生する。恩寵は、人間を愛の交わり、神に対する愛と隣人に対する愛に招く」（Rodgers, op. cit., pp.257-9）、と。

(82) 大木英夫『倫理思想』、一九九頁。
(83) Rodgers, op .cit., p.264.

参考文献

● 第一次文献

P. T. Forsyth, *The Christian Ethic of War, Longmans Green*, 1916.
P. T. Forsyth, *Congregationalism and Reunion*,Independent Press,1952.
P. T. Forsyth, *The Church, The Gospel and Society*, Independent Press, 1962.
P. T. Forsyth, *Faith, Freedom, and the Future*, Hodder and Stoughton, 1912.
P. T. Forsyth, *Positive Preaching and Modern Mind*, Hodder and Stoughton 1907.
P. T. Forsyth, *The Principle of Authority: In Relation to Certainty*, Sanctity and Society, Independent Press, 1913 1952.
P. T. Forsyth, *The Work of Christ*, Independent Press, 1910 1952.

● 第二次文献

John Tulloch, *English Puritanism and Its Leaders: Cromwell Milton Baxter Bunyan*, William Blackwood and Sons, 1861.
T. Hart (ed), *Justice the True and Only Mercy: Essays on the Life and Theology of Peter Taylor Forsyth*, T&T Clark, 1995.
John Buchan, *Oliver Cromwell*, Hodder and Stoughton 1934 1967.
W. L. Bradley, *P. T. Forsyth: The Man and His Work*, Independent press, 1952.

A. M. Hunter, *P. T. Forsyth: Per crucem ad lucem*, SCM Book Club, 1974.
Robert McAfee Brown, *P. T. Forsyth: Prophet for Today*, The Westminster Press, 1952.
D. M. Lloyd-Jones, *The Puritans: Their Origins and Successors*, The Banner of Truth Trust, 1991.
Scottish Journal of Theology, Vol.50, Number 1 (T&T Clark, 1997).
John H. Rodgers, *The Theology of P. T. Forsyth: The Cross of Christ and the Revelation of God*, Independent press, 1965.
Thomas Goodwin, *The Works of Thomas Goodwin*, 12 vols (Tanski Publications, 1996).
Dictionary of National Biography, Vol.viii, (Oxford University Press,1973).
大木英夫『新しい共同体の倫理学――基礎論　上・下』教文館、一九九四年。
澁谷浩『オリヴァー・クロムウェル』聖学院大学出版会、一九九六年。
倉松功・近藤勝彦編『福音の神学と文化の神学』教文館、一九九七年。
大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』新教出版社、一九六六年。
大木英夫『ピューリタン』中央公論社、一九六八年。
マリー・トルミー『ピューリタン革命の担い手たち』大西晴樹・浜林正夫、ヨルダン社、一九八三年。
大宮溥『フォーサイス』日本基督教団出版局、一九六五年。